

事例番号 085 人々の交流を生み出す公園(愛知県名古屋市栄公園)

1. 背景

名古屋の都心部は名古屋駅周辺地区と栄周辺地区との2つの核から構成されている。

名古屋駅周辺地区は、JR、名鉄、近鉄など複数の鉄道が集中する名古屋の玄関口である。1999年に「JR セントラルタワーズ」がオープンし、今後も「ミッドランドスクエア」、「名古屋ルーセントタワー」など超高層ビルが相次いで完成を迎える予定であり、広域からより多くの人々が集まるようになってきている。

一方、戦災復興土地地区画整理事業により生み出された百メートル道路と大規模な地下街を持つ栄周辺地区は、名古屋を代表する商業の中心である。近年、話題性の高いブランドなどの路面店が増えてきており、名古屋駅とはまた異なるにぎわいを見せている。

旧栄公園はその栄地区に位置していた。そして、栄地区では旧栄公園に隣接する旧愛知県文化会館及び旧NHK名古屋放送会館が施設建物の老朽化に伴い立て替えの時期になっていた。そこで、公園の有効活用の観点から、両施設とその東側に位置する旧栄公園を入れ替えて一体的に整備することを目指し、1986年、名古屋市、愛知県、NHKの三者で覚書を取り交わした。

1991年にNHK名古屋放送センタービルが、1992年に愛知芸術文化センターが完成した。「栄公園地区(広場ゾーン)」(以下、「オアシス21」)は、他の施設から少し遅れて事業化の検討が進められ、様々な見直しを経て2002年9月に完成した。

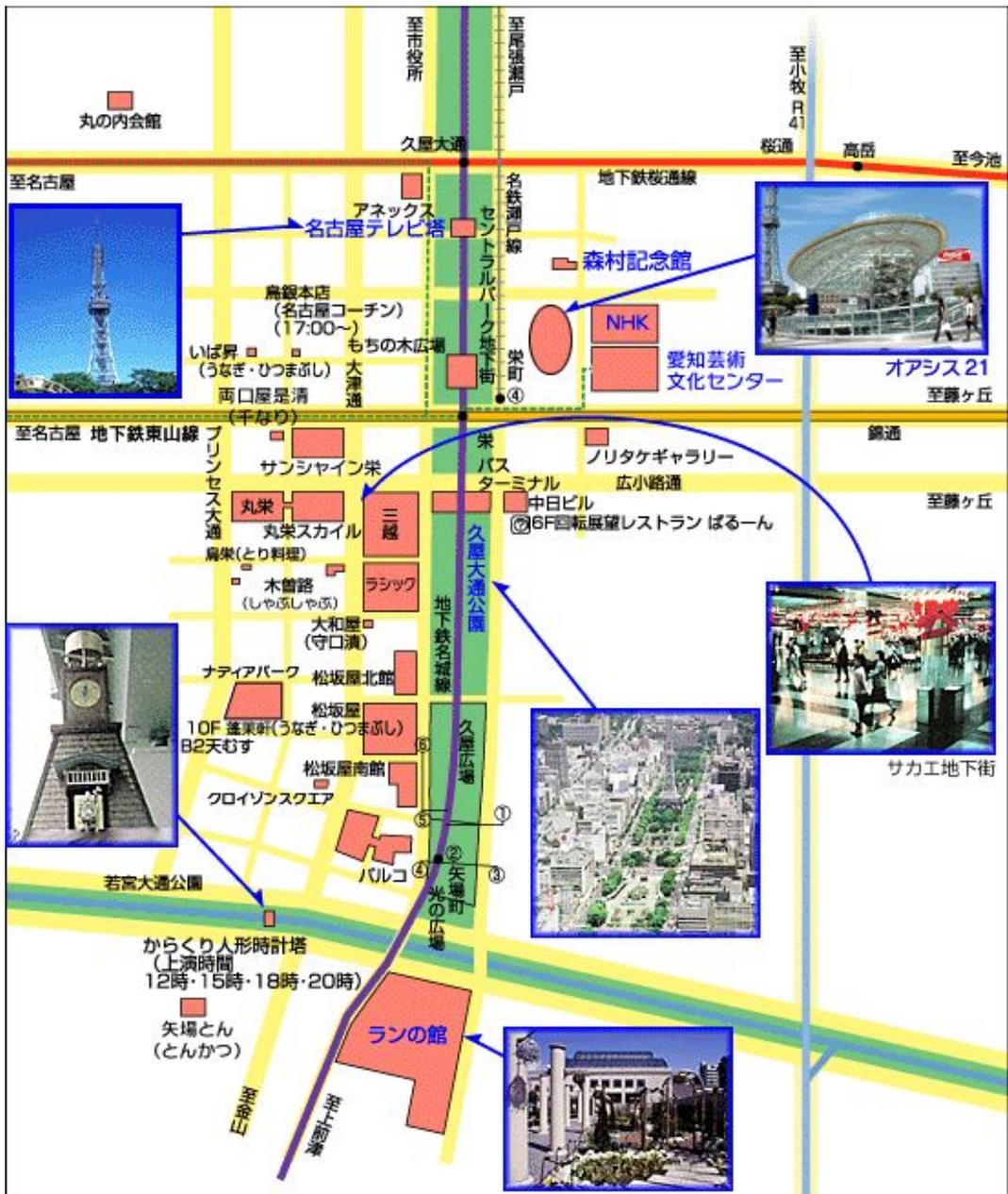
2. 目的

人々の交流が拡大する都市公園をつくることが目的である。従来のようにピクニック、小スポーツ等にはばかり利用される公園ではなく、都心という立地特性を活かして公園内の様々な場所でイベント等が開催され、そこで往き来する人々の交流が生まれる都市公園をつくることを目指している。そのような観点から、栄地区、芸術文化センターなどを地下街を通じて相互にアプローチできるようにし、また、分散していたバス停留所を集約して交通の結節点にしている。

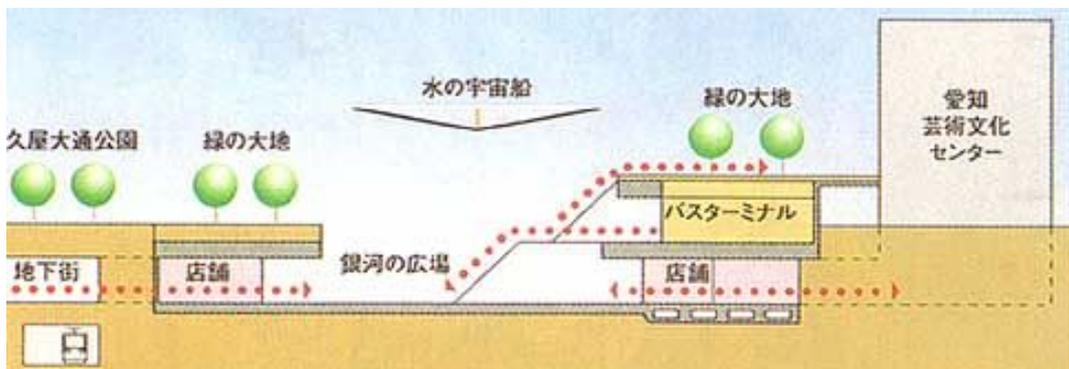
3. 取り組みの体制

公園を一体的に管理運営する主体として第三セクター「栄公園振興株式会社」を設立した。名古屋市が所有する公園施設、交通施設(バスターミナル)の管理、栄公園振興(株)が所有する商業施設の整備及び賃貸借を営むことを目的としている。

資本金総額は15億円である。出資者は名古屋市をはじめとする23団体であり、出資比率は名古屋市が52.5%、中部財界が残りの47.5%である。株式は非公開であり、増資の予定もない。現在の組織体制は役員17名(内3名常勤、14名非常勤)、職員16名(うち市からの派遣3名)となっている。



栄公園周辺 (資料:財団法人名古屋観光コンベンションビューローホームページ)



土地利用断面図 (資料:財団法人日本造園修景協会)

4. 具体策

(1) 事業化の経緯

① 栄公園地区の再整備計画

前述のように、旧愛知県文化会館及び旧 NHK 名古屋放送会館と旧栄公園とを入れ替え、それぞれ「文化施設ゾーン」、「広場ゾーン」として再整備することとなり、1986 年 4 月、名古屋市、愛知県、NHK の間で覚書が結ばれた。

「広場ゾーン」の愛称は市民公募(応募数 6,609 件)により「オアシス 21」と決定された。また、都心のシンボル軸である久屋大通公園を分断していたバスターミナルも公園化し、「広場ゾーン」の公園地下に移転することとした。

NHK 名古屋放送センタービル、愛知芸術文化センターが完成後、「オアシス 21」の事業化検討が進められ、1994 年、栄公園振興(株)が設立された。

② 事業の見直し

将来的なバスターミナル需要の変化や景気後退による市の財政状況の変化などから、着工目前の 1996 年に事業が凍結された。そして、事業が大幅に見直されることとなった(バスターミナルの構造・規模の縮小、全体事業費の縮減、発注方式の提案競技化等)。

③ 提案協議の実施

見直しの結果、建設費は 200 億円が上限となった。そして、計画見直しの基本方針で整理された設計条件により提案協議が実施された。その結果、地下にイベントのできる大規模な空間を確保し、地上公園に広い吹き抜けとシンボリックな大屋根を配し、他を芝生広場でまとめるという案(株式会社大林組の案)が選択された。事業費は 147 億円と最も低廉であった。

④ 建設

公園やバスターミナルなどの主要部分は、財団法人名古屋都市整備公社がそのノウハウを活かして建設し、完成後に市が取得する方式となった。店舗・地下吹き抜け広場は栄公園振興(株)が建設した。地下広場は同社が NTT-A 事業の無利子融資を活用して整備し、完成後に名古屋市に無償譲渡した。

⑤ 管理

指定管理者制度の導入により 2006 年度から栄公園振興(株)が公園施設、交通施設(バスターミナル)の指定管理者となり、同社の商業施設と一体的に管理している。



栄公園「オアシス21」全景（撮影：センターフォト）



栄公園「オアシス21」夜景（撮影：Hideki CASAI）



**まちの真ん中の、
くつろぎと憩いの空間です。**

見とおしの良いなだらかな芝生の斜面には花壇が彩りを添え、春と秋に表情をかえる二種類の樹木が、宇宙船をとりまくように並びます。ベンチに座ったり、芝生の上に寝転んだり。左手前の久屋大通と、右奥のNHKビル、愛知芸術文化センター(2階部分)とが、なだらかな芝生の斜面でつながります。



**ガラスの大屋根の下には、
吹き抜きの地下広場があります。**

さまざまなイベントや市民活動に応える、多目的な空間です。隣接する愛知芸術文化センター、NHK名古屋放送センタービル、地下街とつながって、互いに行き来しやすくなります。また、地上公園と吹抜広場は、吹き抜けをぐるりと取り巻くスロープでつながれるほか、エスカレーターやエレベータ、階段でも行き来できます。



**空中に浮かぶガラスの大屋根は、
オアシス21のシンボルです。**

ガラスの上には薄いペールのように水が流れ、無数の光の波紋を描き出します。外周には園路があって地上14mの空中散歩が楽しめます。

「水の宇宙船」の軸は名古屋城の方角を向いています。



**新しいバスターミナルは、
自然光をとりこんだ半地下にあります。**

明るく広々とした待合スペースは、快適性抜群です。また、地下鉄栄駅や名鉄栄町駅へのアクセスが便利になり、名古屋の新しい交通拠点となります。(市営バス・名鉄バス・JR東海バス・三重交通バス)



**「銀河の広場」を取り巻くように、
魅力的な店舗が並びます。**

子供から大人まで楽しめる、賑わいとふれあいの場。いままでの地下街とはひと味ちがう、広場と一体化した新しい商業空間の誕生です。



オアシス 21 のフロア構成 (資料) OASYS21 ホームページ資料を加工

(2) 事業概要

「オアシス 21」の整備においては、都市公園としてのオープンスペースを確保することが重要な要件であることは言うまでもないが、それとともに、従来の公園とは異なり都心の限られた土地を高度利用するため、公園の地下利用と周辺施設とを連携させつつ地域活性化のための店舗を誘致することやイベント等が開催できる空間を確保することが重要な要件であった。それらを両立させるために公園を立体化することとした。「オアシス 21」は、立体都市公園制度（現在は都市公園法に定められている）が創設される前に建設された施設であったため、当時としては新しい試みとして旧建設省と入念な調整を行って建設された。

① 施設内容

「オアシス 21」は、「水の宇宙船」、「銀河の広場」、「緑の大地」、「地下店舗及びバスターミナル」の 4 つのフロアから構成されている。

1) 大屋根「水の宇宙船地球号」

大屋根は長辺が 106m、短辺が 36m の楕円形の、地上から 14m の高さに位置する強化ガラス製の水盤である。その水盤の外周を散策することができ、周辺の景観を楽しむことができる。水盤は水深が 6cm から 10cm あり、地下の「銀河の広場」への直射日光を遮断する機能をもつとともに、光のゆらぎを映し出している。

水盤面の水は地下水を滅菌、ろ過して供給されている。水の循環も殺藻処理と併せて日に 4 回行われている。それにより常に安全で快適な水質が保持されるよう工夫されている。また、循環後の水はトイレの洗浄水や植栽の灌水に有効利用されており、環境負荷の軽減にも配慮されたシステムとなっている。

水盤面中央には噴水がある。夜はその噴水や歩廊面をライトアップ等で効果的に演出しており、大屋根は「オアシス 21」のシンボルになっている。

2) 地下吹抜広場「銀河の広場」

吹抜けで地上とつながるイベント広場（「銀河の広場」）は、周囲の園路も含めると約 7,600 m² の広さを有する全国でもめずらしい大規模な地下公園である。この地下空間は大屋根によって全天候型のイベント空間となっており、スポーツ、コンサートなども含め様々な活動に対応できるようになっている。周辺の地下街、鉄道駅、愛知芸術文化センター、NHK 名古屋放送センタービルとは地下通路で連絡され、人の回遊性が高い広場になっている。また、自然光や自然換気を積極的に取り入れることによって、空調により管理された地下街とは異なる外部環境に近い公園空間になっている。

3) 地上公園「緑の大地」

地上公園は、久屋大通側から愛知芸術文化センターや NHK 名古屋放送センタービルに至るデッキに向けて全面が緩やかな斜面芝生広場で空間処理され、シンプルかつ大胆なデザインになっている。それにより東西の高低差を自然に処理するとともに、都心部には貴重なまとまりのある広場空間を提供している。

主な施設として、「光の回廊」(公園の南北に配置されたバスターミナルへの通路、トイレ、倉庫からなるガラスの建物)、「霧の劇場」(愛知芸術文化センター連絡デッキ前の霧の発生する広場)、「雲のゲート」(雲をかたどった地下街との連絡口、地下・地上を結ぶ階段)等が設置されている。また、園路の配置デザインに名古屋の都市計画の基本パターンであるグリッド形状を採り入れた「記憶の道」を設けたり、大屋根の軸線を名古屋城に向けるなど、名古屋の歴史や特徴を意識したデザインが施されている。

植栽は四季を彩る桜ともみじが植えられ、春と秋に姿を変える 2 つの惑星の奇跡をイメージして配置されており、適度な木陰と休憩スペースが創られている。また夜間の安全性も重視し、視線が隅々まで行き届くよう、地被植栽を主とした植栽配置が採用されている。

4) 地下店舗

地下広場の周囲には面積約 4,500 m²、30 区画の店舗が整備されている。全ての店舗が広場に顔を向けた形で配置され、裏側のない店舗配置が特徴になっている。店舗は訪れる人に創造と体験を提供する「感性の玉手箱」をコンセプトとして広場と一体的に整備されている。

5) バスターミナル

新しいバスターミナルは自然光をとりこんだ半地下(床面-1.5m)にある(面積 6,200 m²、バース数 10 バース)。案内所、店舗等も備えている。

バスの乗車場と待合スペースはガラス壁で仕切られている。待合スペースはバス到着時に扉が開閉可能となるホームドア方式により明るく広々とした空間になっている。また、地下鉄栄駅・久屋大通駅や名鉄栄町駅へのアクセスが地下でつながり、利便性が向上したことから名古屋の新しい交通拠点となっている。

② 環境への配慮

「オアシス 21」では、地球に負担をかけずに、自然の力を最大限利用することで、地球にやさしい施設整備を目指している。

- 1) 地下広場、バスターミナルにおいてはトップライトを多用し、自然採光を導入することで照明の負荷を軽減している。
- 2) 地下広場の半屋外空間では細霧冷房や局所空調の導入により夏の涼感を演出し、効果的な冷暖房を行っている。
- 3) 人工地盤緑化によりヒートアイランド現象を緩和している。
- 4) 水を張った大屋根により夏場の地下への輻射熱を軽減している。
- 5) トイレ洗浄水や植栽のかん水には雨水の再利用と井戸水を活用している。
- 6) 空調設備には氷蓄熱システムを導入し夜間電力を使用している。
- 7) 太陽光発電の導入によりトイレ照明を行っている。

(3) 交流の効果

オープン後の来場者は休日が6～7万人/日、平日4～5万人/日にも上り、予想以上のにぎわいであった。オープン後4年目を迎えた2005年度でも1日あたり休日で約4万人、平日で約2～2.5万人であり、年間1千50万人を越える来場者がある。

また地下広場では、さまざまなイベントが開催され、年間のイベント開催回数、開催日数、入場者数は、平成17年度でそれぞれ207回、291日、約240万人にのぼっており、都心の交流空間として中心的な役割を果たしている。

愛知芸術文化センター、NHKビル、地下街、地下鉄駅などの周辺施設を立体的に結び付け、人の回遊性を重視した地上・地下の連絡通路を設けたことなどにより、魅力ある都市空間が形成されている。

(4) 栄公園振興㈱経営状態

栄公園振興㈱の収入の多くはテナント賃料である。イベント広場では栄公園振興㈱がイベントを誘致し、にぎわいの創出を図っている。

テナント賃料のシステムは、一定賃料の上に売上に応じた歩合制をとっており、周辺地区の賃料と同程度に設定している。

1994年の会社設立から施設開業までの準備期間に要した諸費用及び「オアシス21」の店舗・地下広場の建設費用の借入金の返済に関しては、開業後21年目に累積赤字解消を予定している。現在の状況では早めに償還が可能になると見込まれている。

損益計算書の要旨(2003年4月1日～2004年3月31日)(単位:千円)

営業収益	986,962
営業費用	871,554
営業利益	115,408
営業外収益	26,819
営業外費用	12,505
経常利益	129,721
特別損失	142,614
税引前当期純損失	12,892
法人税・住民税及び事業税	1,530
当期純損失	14,423
当期未処理損失	120,128

注(1)支配株主との取引高 営業取引高 195,848千円
(2)1株当たりの当期純損失 480円79銭

(資料:「オアシス21」ホームページ)

5. 特徴的手法

人々の交流が生まれる公園をコンセプトにした点が大きな特徴である。

ハードの面では、都心部に発達した人通りの多い地下街に接続し、地上と地下とが一体となった立体型公園とすることで、行き交う人々の多い施設となっている。周辺の文化施設との接続やバスターミナルの設置も人々の回遊性を高める手法の一つとなっている。

ソフトの面では、利用者の通過点となる地下広場で大規模イベントを開催することで店舗や公園利用を促し、都心の活性化や賑わいに寄与している。コンセプトの実現に有効に働いたと考えられる。

公園の運用面では、第三セクターが公園施設やバスターミナルなどの公益施設の維持管理を一括して担い、弾力的にイベント開催を行うことにより、安定した経営ができています。

6. 課題

開業後4年を経過したが、「立体型公園というコンセプトに基づき、貴重な都市空間を地上・地下を含めて有効活用し、人を引き付ける魅力的で快適な施設として、都心のにぎわいを相乗的に高める」という当初の目的はほぼ達成できたものと思われる。今後は、この状況を継続していくために、高レベルな管理水準の維持や賑わいをさらに高める方策の検討などが求められる。

(参考・引用文献)

OASYS21 ホームページ